

あはれなるもの、孝あはる人の子。よを頭の前頭が、御獄精進したる。たて隔てぬで、ハム行ひたる曉の體。いみづつおはれなし。むつもつせん人などの四見まつて聞くひだり思ひやる。謂いゆせじのあつわせ、いかほむわねびつてしまふたる。平ひかに歸り着きたるしに。こと A 鳥體子のやまなび、少し入わらぎ。なほしもじき人と聞くひるねび。りむなくやつねでひそ語つと知りたれ。

右衛門佐宣孝とこひたる人せば、「あがめだまひじひだつ。ただ清水衣を着て語でむし、なでひじとかある。」と、さすがにまつてこひて語でよ。御獄精進のたまほづ。」といへ。二月つりもつ。紫のこと濃やか眞實、白き襷、玉吹のこみじつおひのおどりこむなど着て、隆光が生殿助たるにこな、青色の襷、緑の衣すりせひのかしたる水干といふ袴を着せて、いつら続あ語じたつむき。帰る人も、今語れるか、おひこひ、あやつせりとひ、「あべて、昔むつうの日」かかる姿の人見下せりつ。」と、あれましがつしまへ。四月一日に歸つて、六月十日のほど、筑前守の辞せこになつたつじひだ。」と、「言ひかひにしたがはず。」されば、あはれなる」と云ふあひなむ。御獄のつこぢなむ。

(改ページ)

問題 全て適切な漢字で、その他採用語を書くべきは問答無用で不可。鮮やかに回遊かひいじと。

一 傍縁部「あはれなるもの」の意味を答へよ。また、一重傍縁部「なる」を文法的に説明せよ。

二 傍縁部「よき男の若きが」を口語訳せよ。また、助詞を抜き出してその種類と、文法的働きを答へよ。

四傍縁部「御獄精進したる」について、「御獄精進」の読みを答へよ。

また、「たる」は連体形であるが、いの場合はのつに文末の活用語を連体形にするいじとを、文法的に何と呼ぶか、答へよ。

五傍縁部「たて隔てぬ」を口語訳せよ。また、「る」の終止形と、活用の形及び活用形を答へよ。

六傍縁部「つら行ひたる曉の體」について、全体を口語訳し、「體」の読みを答へよ。助動詞を抜き出し、文法的意味を答へよ。

七傍縁部「むつましき人など」について、「むつましき人」の意味を答へよ。また、「むつましき」と「の」を文法的に説明せよ。

八傍縁部「田實あつて聞くひだり思ひやる」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味を答へよ。

九傍縁部「いかないむなし」を品詞分解して文法的に説明せよ。また、口語訳せよ。

十傍縁部「平ひかに語で着あたる」を口語訳せよ。また、一重傍縁部「に」を文法的に説明せよ。

十一 傍縁部「絆繩なじひだ」「云派だ」の意味の「め」から始まる語が入る。絆繩に入れても最も適切な形容詞一語を答へよ。

十二 傍縁部「鳥嘔子」の読みを答へよ。

十四 傍縁部「少し入わろき」を口語訳せよ。また、形容詞を指摘し、文法的説明をせよ。

十五 傍縁部「なほこみじき人と聞くひゆれ」を口語訳せよ。また、その活用形での理由を答へよ。

十六 傍縁部「右衛門佐宣孝といひたる人は」について、「右衛門佐」の読みを答へよ。助動詞を抜き出し、文法的意味を答へよ。

また、この人物は、ある人物の夫であるが、ある人物とは誰か、答へよ。

十七 傍縁部「あらきなき」となり」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味、活用形、及びその活用形での理由を答へよ。

十八 傍縁部「じよなく、知りたれ」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的説明をせよ。また、口語訳せよ。このあたり大事。

十九 傍縁部「なでひじとかある」について、「なでひじ」の元の形を答へ。全体を口語訳せよ。また、活用語を指摘し、活用形を答へよ。

二十 傍縁部「必ず」のたまほづ」について、副詞を抜き出し、呼応する語を指摘せよ。全体を口語訳せよ。

助動詞を抜き出しして文法的意味を答へよ。敬語を抜き出しして文法的に説明せよ。

また、「あやこひ」と同様の意味で用ひられてこの語をさりやれよ。前から探し、文中からこのまま抜き出せ。

一一 傍縁部「三重つりもつ」について、「三月」の読みと、「つかひ」の意味を答へよ。

一二 傍縁部「指貫」、「襷」及び、「出歎」の読みを答へよ。

一三 换縁部「いみじつおどりおどりしきなど着て」を口語訳せよ。また、形容詞を抜き出しして文法的に説明をせよ。

一四 傍縁部「今語つぬせ」は、ある語を省略した表記となつてこむ。その語を補つた完全な形を答へよ。

一五 傍縁部「紅」、「水干」及び、「袴」の読みを答へる。奴は失格。

一六 傍縁部「つら続き語でたつけるを」を、主語を補つて口語訳せよ。また、助動詞を抜き出しして文法的説明をせよ。

一七 傍縁部「よき男の若きが」は、ある語を省略した表記となつてこむ。その語を補つた完全な形を答へよ。

一八 傍縁部「めづらしげ」、「あやしき」と「たんじ」の意味を答へよ。また、誰が、何につけていつのよつて感じたのか、本文に即して説明せよ。

一九 傍縁部「すべて」、「見えやつ」を口語訳し、助動詞を抜き出し、文法的意味を答へよ。また、副詞を抜き出、呼応する語を答へよ。

二十 傍縁部「あさもしがりしを」を品詞分解して文法的に説明せよ。また、全体を口語訳せよ。また、「四月」、「六月」の読みを答へよ。

二一 傍縁部「筑前守」の読みを答へ。全体を口語訳せよ。活用語を抜き出し、文法的説明をせよ。

二二 傍縁部「け」と「ぬ」にたがはせむと聞こえしか」を品詞分解して文法的説明をせよ。また、全体を口語訳せよ。

二三 傍縁部「に」、「ね」、「及び」、「なつ」について、それぞれ文法的に説明せよ。

解答

- 一 意味 = 「しみじみと感動するもの」(要約して「感動せせりれる」也可。同義可。)
- 説明 = 「形容動詞ナリ活用『あはれなつ』連体形の活用語彙」(『なつ』の識別。大事。「説明せよ」問題では「。」も必須。)
- 二 行動 = 「親の喪に服する子の『じと』」(単に「親孝行な子」也可。「～じと」で継ぶ。「。」なしは不可。)
- 三 訳 = 「身分が高い男で若い男が」 助詞 = 「の・格助詞・同格」 が・格助詞・主格 (格助詞の同格用法。「よし」は「身分が高」。)
- 四 読み = 「みたけそつじ」(歴史的仮名遣)「やいへん」可。)
- 文法的呼称 = 「準体言(の用法)」(活用語の連体形を体言のよひに使う用法。真後に体言が補される。)「いじだせ」「いと」など)
- 五 訳 = 「周囲と隔離した部屋に座つて」(脚注に述べ「るる」は原意として「こゑ」ではなく「座る。」)
- 終止形 = 「ゐる」 活用の型 = 「ワ行上一段活用」 活用形 = 「連用形(上一段動詞は「ひ・こ・せ・に・み・ぬ る。」)
- 六 訳 = 「勤行をしてくる明け方の礼拝」(「行ふ」は出家してくる人がすると「修行」、出家してこない人がすると「勤行」なので注意。) 読み = 「ぬか」(頭を地につけて礼をする)と/or「ぬかげく。」 助動詞 = 「たる・存続」(断定「たり」との区別ができない。)
- 七 意味 = 「親しい女性」(「むつまご」と/も「女性に対する言こと方。」)
- 八 「むつまご」 = 「形容詞シク活用『むつまご』連体形。(「むつまごしき」とかではない。)「の」 = 「主格の格助詞」
- 九 訳 = 「今この日を覚まして聞いてくるだらうと思いやる(いと・気持ひ)」 助動詞 = 「ひむ・現在推量」(「今この日へてこるだらう。」)
- 品詞分解 = 「形容動詞ナリ活用『いかなり』未然形『いかなり』+推量の助動詞『む』連体形『む』
- 十 訳 = 「じつであらつかなどと」(「いと・かなり」) せ通じないが「いかなり」は形容動詞。 「いか」が主語にならな。)
- 十一 空欄補充 = 「めでたけれ」(「め」で始まり賞賛の意をもつ形容詞は「めでまし」「めぐらし」「めでたし」「めやかし」など)
- おもまし = 「田が覚めるほど・思いのほか『心外だ・立派だ』(良い意味にも悪い意味にも使ひ。)
- めぐらし = 「通常・ほかと違つて新鮮で『わざわらし』・賞賛すべきだ」(主として良い意味に使ひ。)
- めでたし = 「素晴らしい・立派だ・賞賛すべきだ」(良い意味に使ひ。)
- めやかし = 「見ていて抵抗がなく『見た感じがよ』・見た目がよ』(悪くない) 程度の意)
- 比較等でなく純粹に「無事に参詣した」といつ行為を賞賛しているので「めでたし」を選ぶ。係助詞「いと」があるのでも自然形で一般に「空欄には」『』が入る 適切な形にして入れよ 系の問題は係助詞問題「や・なむ・や・か」は連体「いと」は自然。)
- 十二 読み = 「えまご」(「えまつし」) 可。)
- 十三 訳 = 「す」しみつともなし」 形容詞 = 「人われのれ・形容詞ク活用『人われる』・係助詞「れ」の結びとつなげて「る」ため連体形。」
- 十四 訳 = 「やはつ 身分が高い人と申しつけても」(「はせ」 = 「やはつ」、「聞じられ」は「聽ぶ」の謙譲語「聞ひな」の口然形。)
- 十五 訳 = 「ひどく 粗末な格好で参詣すると言ひている」(「じよなし」程度がはなはだしく違つてこる。 やつる「粗末な様子だ。」)
- 十六 助動詞 = 「たれ・存続・口然形」 理由 = 「係助詞「いと」の結びとつなげて「る」か?」(理由説明は「～か?」で「。」も。)
- 読み = 「いとものすけ」(「えもん(ゆもん)」も可)「べせ可」(「すけ」は次回「かみ・すけ・じゅり・わかな」大事。)
- 十七 助動詞 = 「たる・完」 誰の夫か = 「紫式部(夫は藤原宣孝。)」の記述がもどりで清少納言に敵意をもつになつたとか。)
- 訳 = 「つまらないことだ」(「あらきなし」 = 「つまらないことだ」興味めだ。) 助動詞 = 「なり・断定
- 十八 品詞分解 = 「副詞『ただ』+形容詞ク活用『清』」連体形『清き』+名詞『衣』+連用修飾の格助詞『を』
- +力行上一段活用動詞『着る』連用形『着』+単純接続の接続助詞『て』+ダ行下一段活用動詞『調ひ』未然形『調ひ』
- +仮定の助動詞『む』連体形『む』+逆接の接続助詞『に』
- (「」を格助詞といひふ)と/orでも「冒険したくない人は採点者に採点基準を確認してね」と。)
- 訳 = 「ただ淨衣を着て参詣しても」(仮定+逆接で「～ても」。淨衣つてのは参詣用(に限らない)が)の服装。白い狩衣。
- 十九 元の形 = 「なにじこふ」(「なにじこふ」 「なにじこふ」(母語連続回避)「なにじこふ」(撥音便)) 前の語の末尾が撥音(ン)であった場合) それにつれて語の語彙が濁音化する現象があつもつて 例へば「源+氏=通」は「ゲン+シホタル」ではなく「ゲンジボタル」。恩田「仙田」「神田」「本田」の「田」はこずれも「ダ。」)
- 訳 = 「何じこつじがあるだらうか」いや、何もあつぱしない」(反語なのでじつかり詰す。)
- 活用語 = 「あり・未然形 む・連体形
- 二十 読み = 「よも・じ・やひる・じ」(「じ」大人氣) 訳 = 「まさか必ず粗末な格好で語でよどび御嶽は決しておひしゃりなどだらう」
- (「よも」打消語で「あらか~な」、「やひる」打消語で「決して~な」) 助動詞 = 「じ・打消推量
- 敬語 = 「のたまは・むかひの尊敬語」のたまはの未然形で、宣孝から御嶽への敬意 同義語 = 「やつれて」(聞かれるかも。)
- 読み = 「やよこ」(常識つて)と/or「くれない(くれなる)・すいかん・はかま」
- 読み = 「わしぬき・あお(あを)・やまぶわ」
- 訳 = 「たいへん仰々しこものなどを着て」(「おひしゃり」 = 「おおげせだ」「仰々しこ。」)
- 形容詞 = 「こみじつ・形容詞シク活用『いみじ』連用形ワ音便、おひしゃりしき。形容詞シク活用『おひしゃりおひしゃり』連体形。」
- 一四 読み = 「とのものすけ」(「とのものすけ」とも) 「が」 = 「同格の格助詞」
- 敬語 = 「のたまは・むかひの尊敬語」のたまはの未然形で、宣孝から御嶽への敬意 同義語 = 「やつれて」(聞かれるかも。)
- 読み = 「くれない(くれなる)・すいかん・はかま」
- 五六 訳 = 「宣孝と隆光がふたり続いて参詣したそつだが」 助動詞 = 「たり・完」、ける・過去」
- 【中途半端で申し訳ありませんが、続きを読むの解答は「後半」のアリンクの解答編の先頭に配置しますので、なかなかない参考用】

男も女も 郡く清正なれど こゝ黙れ衣着たる印 A。 十円づ。

もつ、十円一円のせむじ。 ただあるかなきかに聞きついたぬむことわづの瓶。
鶏の子いだきて伏したる。 秋深き庭の浅葉に 露のころこの玉のやつ
にて置きたる。 夕暮れ、曉に、河竹の風に吹かれたる。 口宣まつて聞きたる。
また、夜などもかべ。 三里の川、思ひかはつたる隠れ人の仲の セく方あ
つて、心にやまかせぬ。

問題

一 傍線部「若く清げなるが」について、語語分解して文法的説明をせよ。

二 段欄Aに入れるべき最も適切な語を答へよ。 パターンで分かねば。

三 傍線部「九月」「十円」の読みを答へよ。

四 傍線部「ただ、きつきてすの頃」を口語訳せよ。

五 傍線部「浅葉」の読みを答へよ。

六 傍線部「削除」（「」）を文法的に説明せよ。

七 傍線部「せく方あつて、心にもまかせぬ」を口語訳せよ。 あた、「ぬ」を文法的に説明せよ。

八 重傍線部「たる」（七箇所）につけて、それが文法的意味を答へよ。

九の作品の文字学的ジャンル 作者 作品名 及び成立時期をそれぞれ漢字で答へよ。

解説編【前半】の解説があふれた部分を先に配置しておき。

一七 言語規範説=「今語つる人も」（「他」も可） 準体言の用法

一八 意味=「珍しへ 不思議なこと（アキラリ）」 説明=「御嶽に參詣して禪ぬ人や」これから參詣する人が、直孝・隆光親子の

參詣の服装の異様をいつて 珍しへ 不思議なことだと感じた。（「～と感じた」） で繋が。「」必須。）

一九 訳=「つねに 韶かひいのヨシ」 そのものならの人は見えなかつた 助動詞=「わつ・打消・つ・壳」

二十 語彙=「すべて」 皆なかの語=「アリ」（「あべて」、「お酒語」）で「あつたく・つゝかく・なし」 単独だと「縦じて・だこたこ」）

二十一 品詞分解=「^{副詞}に四段活用動詞「あれあしがる」連用形『あさましがり』+過去の助動詞「き」連体形『』

+単純接続の接続助詞「を」（「がる」土岐四語・形容詞ク活用の語幹・形容詞シク活用の終止形につて動詞化）

訳=「驚きあわれたが」（「あわせ」）=「驚きあわれるばかりだ」。 その訳し方覚べぬ） 読み=「ハづれ・みばつれ」

二二 読み=「かくせらのかみ」 訳=「筑前守の後任になつた」とは（真証しにく。）

二三 活用語=「辞せ・サ変動詞『辞す』未然形、し・過去の助動詞『れ』連体形 なり・^{副詞}に四段活用動詞『なる』連用形

たり・壳」の助動詞『たゞ』連用形 し・過去の助動詞『れ』連体形

（過去「れ」は連用形接続だが、力変には未然形か連用形につき、他のも連体形が口然形だ「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」）

二四 か変では未然形につくとあれば、これは連体形か已然形、連用形につくと終止形。 「せつ」「せつか」「つれ」終止形にはつかない。）

二五 品詞分解=「副詞『ナ』」+八行四段活用動詞『言ふ』連用形『言ふ』+過去の助動詞『けつ』連体形『ナ』

+連用修飾の格助詞『』+八行四段活用動詞『違ふ』未然形『違は』+打消の助動詞『き』終止形『』

+詠嘆の終助詞『も』+連用句を受け格助詞『と』+や行下|段活用動詞『聞い』連用形『聞い』

+過去の助動詞『き』已然形『つか』、係助詞『い』の結びのため、

訳=「ながのせむし 言つたゞとい違ねな」 ながと讀判になつた（「聞い」）=「詠歌になら」。 最重翻古語 語義多數 詞書参照）

二六 「」=「歎定の助動詞『なつ』連用形、「ね」=「打消の助動詞『す』」已然形、「なつ」=「歎定の助動詞『なつ』終止形」

【】よつ『後半』の解説編】

一 品詞分解=「形容詞ク活用『若し』連用形『若く』+形容動詞ナフ活用『清げなり』連体形『清げなる』+主格の格助詞『が』

二 空欄補充=「あはれなれ」（段のタイトルが「あはれなるもの」である」とから「空欄に分かる」「」があるのと口然形で）

三 読み=「ながつき・かんなつき」（「かみなづき」可。「～すれ」は表記が完全に間違つてゐるだけ不可。）

四 訳=「わすかにあるかなこかくらこに聞せつけた」の物の頃

（「ただ」=「たつた」、「わすか」、「きつきてす」=「」で「」=「キツギツハ」。）

五 読み=「あわせ」（「あわせ」）

六 説明=「格助詞『に』」の一部（もしやとは格助「」+接助「」ではあつたが一語じひと扱い 格助詞）

七 訳=「邪魔をする者かあつて、思ふ通つにないなこと」（「かしみじみと感動する」）（「あはれなつ」を翻訳「塞く」=「邪魔する」）

八 「たゞ」判別=「衣着たる」・存続「聞きつけたる」・壳「伏したる」・存続

九 ジャンル=「隨筆」 作者=「清少納言」 作品名=「枕草子」 成立時期=「平安時代（中期）」

（「」は「清少納言」枕草子、鷗長明「方丈記」、兼好法師「徒然草」。）

あはれなるもの（前半）本文 口語訳

前半・後半に分けたのは単に編集上の都合です。意味段落等ではありません

各傍線・記号は 注意すべき表現（体言・用言ほか） 助動詞 助詞 係り 結び（または係り 結びの消滅・係り 結びの省略）
赤シートを使って暗記・確認用に利用してください。

尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

しみじみと感動させられるもの、親孝行な人の子。身分の高い男で若い男が、御嶽精進をしている様子。
あはれなるもの、孝ある人の子。よき男の若きが、御嶽精進したる。

他の部屋と隔てた部屋に座って、勤行している明け方の礼拝は、たいへん趣き深い。親しい女性などが、

たて隔てぬて、うち行ひたる暁の額、しみじうあはれなり。むつましき人などの、

今更の目を覚まして聞いているだらうといふ思ひやる様子。参詣するときの様子が、じつであのうなどといふつつしみ心配しているが、

田覓まして聞くひりむ、思ひやむ。詠つるせどのあつたま、いかならむなど、つつしみ怖ひたる

無事に到着したことは、たいへん立派なことである。鳥帽子の様子などが、少しみつともない。

平らかに詠で着きたるには、いとめでたけれ。鳥帽子のさまなど、少し入わろき。

やはり、身分が高い人と申し上げても、ひとく粗末な格好で参詣するものだと聞いていた。

右衛門佐宣孝といつた人は、「つまらないことだ。ただ淨衣を着て参詣したとしても、何どころがあるうが、いや、何もない。

必ずまさか粗末な格好で参詣せよと、御嶽は決しておっしゃらないだらう」と、二月月末に必ずよもあやしうて詠でよど、御嶽わらにのたまはづ。」といふ。二月つゝもつゝ

紫のたうそつ濃い指貫、白い狩衣、山吹襲ねのたいへん仰々しいものなどを着て、

主殿助である隆光には、青色の狩衣、紅の衣、入り乱れた模様を派手に揃り染めにした水干袴を着せて、

隆光が主殿助なるには、青色の襷、紅の衣、すりもどりかしたる水干といふ袴を着せて、

一人続いて参詣した。そうだが、帰る人も、これから参詣する人も、珍しく不思議なことに、

うち続き詠でたりけるを、帰る人も、今詠ひるも、めづらしく、あやしき」と、

「つまむ、昔からいの山吹」のよつた姿の人を見えなかつた。と、驚きあきれたが、四月一日に帰つて、

「すべて、昔ぶりの山吹」かかる姿の人見えざつて、と、あさましがつしを、四月一日に帰つて、六月十日の中止に筑前守の後任になつたことは、たゞかに、言つたことに違わないなあと諷刺になつた。

これは、しみじみと感動させられることではないが、御嶽の話のついである。

「れば、あはれなることにはあらねど、御嶽のつこだなり。

あはれなるもの（後半）本文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

各傍線・記号は 注意すべき表現（体言・用言ほか） 助動詞 助詞 係り 結び（または係り 結びの消滅・係り 結びの省略）

尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

男も女も 若く綺麗な人が たいそう黒い衣を着て いる様子が 趣き深い。

男も女も、若く清げなるが、いと黒き衣着たるはあはれなれ。

九月月末 十月一日の辻に ただあるかなきかに聞きつけたるきりせりすの声。

九月つゝもり、十月一日の辻に、ただあるかなきかに聞きつけたるきりせりすの声。

鶏が 子を抱えて伏せて いる様子。秋が深い庭の浅茅に、露が 色とりどりの玉のよう におりて いる様子。

鶏の、子いだきて伏したる。秋深き庭の浅茅に、露の、いろこの玉のやつにて置きたる。

夕暮れ、明け方に、河竹が風に吹かれ て いるのを、田を覚まして聞いたる。また、夜などもすべて。

山里の雪 想い合って いる若い人の恋愛の、邪魔をする者があつて、思い通りにならない様子。

山里の雪 思ひかはしたる若き人の仲の、せく方ありて、心こもまかせぬ。

特に連体形で文が終始して いる場合に補われる体言・表現をきむかへと確認していく。

例・春はあけぼの[ことをかし] やつやつ白くなつまく[ことをかし] 山をはぶし明かりて[ことをかし]

紫紺たちたる雲の細くなびきたる[ことをかし] 夏は夜[ことをかし] 月のいのせやらなし、…」この段では明らかに「あはれなつ」。

「語り」は謙譲語であるが、いじり口は取り立てるマーカするいじめとしている。